

平成 24 年 2 月 10 日
総務局

東京都防災会議「地震部会」（第 4 回）議事概要について

1 地震部会の概要

日 時： 平成 24 年 2 月 1 日（水） 10：00～12：10
場 所： 東京都庁第一本庁舎南塔 33 階 特別会議室 S 5
出席者： 平田、中林、翠川、佐竹、安田の各委員
醍醐危機管理監、村松総合防災部長、箕輪企画調整担当部長
保家震災対策担当課長、飯野計画調整担当課長ほか

2 議事概要

被害想定の見直しに関し、各委員から下記のとおり意見が出された。

＜地震動予測計算について＞

- 地震動の予測計算に統計的グリーン関数法を用いて、「 $1/R$ よりも $1/(R+C)$ でよりよい近似となる」としているが、Cを入れることはよい。
- C の値はマグニチュードに依存するので、物理的に説明できる。
- 計算では、崖地特有の震度は出ないが、実際には、崖地で大きい被害が出ることを覚えておいてほしい。特に多摩地域ではそういう地域が多い。
- 表層地盤の増幅度はモデルをつくり応答解析する話もあったが、研究が進んでいないため、従来通り、中央防災会議が使用した地盤増幅度を使う。
- 地域によっては 50m メッシュの震度增幅が出るので、これを基本に震度分析を行うが、多摩の崖地での被害は定性的に加える。

＜元禄関東地震の地震動モデルについて＞

- 元禄関東地震では、房総半島南端のアスペリティを入れても入れなくても東京都の震度分布はほとんど変わらない。
- 短周期の地震動を反映する震度では確かに関係ないだろうが、長周期地震動の場合には影響があるのではないか。
- 震度分布を考える上で沖合の断層のすべりが効かないのは理解できるので、こういうモデルで近似とするのは一つのやり方だが、長周期地震動で影響がないのかということは疑問である。
- 長周期地震動のスペクトルを見れば、房総半島南端のアスペリティは影響がないように思うがいかがか。
- 念のため、アスペリティを房総半島沖合（小断層 11）に置いた場合にも、長周期地震動が変わらないことが確認できればいい。

＜津波浸水想定について＞

- 東日本大震災でも海溝軸まで運動したことから、東京都としても最大クラス（レベル2）の津波の検討の必要性があるのではないか。
- 最大クラス（レベル2）の想定を検討する必要はあると思う。

＜被害想定項目に用いる手法について＞

- 津波による交通機関の影響検証という記載があるが、交通以外にも津波被害は影響するのではないか。
- 地下街と地下鉄の連結場所で、地震によりクラックが入り地下に水が流れ込む可能性があるのではないか。
- 定量的に出るものではないが、シナリオ被害の地下街や大規模集客施設の項目で津波の影響も考慮することになるだろう。
- 火災については、風速15mは過剰で、平均風速は3m、瞬間最大風速が6～7mが妥当ではないか。
- 従来の手法だと、風速6mと風速15mの被害結果は2割程度しか違わない。強い風でも燃える速度にあまり変化がないため、風速を上げても意味はないが、今回はクラスター方式を新しく採用するので、強い風速でどういう結果になるのか示してほしい。
- 千葉県では4～5ブロックに分け、内陸と海側で風速を変えて計算している。これまで、東京は全域を一律の風速でやってきた。
- 地上の鉄道については、揺れによる被害が前提になっているが、区部周辺部で火災が発生する場所を縫うように走る鉄道も多い。火災の影響が鉄道に出る可能性も高い。
- 被災後の通勤問題にどれだけ影響するか。企業のB C Pにも影響を与える。火災が鉄道に与える影響もシナリオで検討した方がいいのではないか。

＜防災対策への反映について＞

- 防災対策をした効果がどうなるかを見せてることで防災対策の推進につながる。家具の転倒防止など、これだけやればこれだけ被害が軽減するということが分かるような被害想定を検討するとよい。

問い合わせ先
総務局総合防災部防災管理課
電話 03-5388-2537